

## 「全鍍連」 2021年 8月号 いきいき地域

全鍍連情報・国際委員 佐藤 博徳 (有)佐藤電化工業所 代表取締役)

「水戸っぽ」



NHKで近代日本資本主義経済の礎を築いたとされる渋沢栄一の大河ドラマが放送されている。その中で水戸藩の第9代藩主徳川斉昭（烈公、1860年没）が注目され、天狗党の乱（1864）なども舞台になった。天狗党の事件について私自身あまり歴史は詳しくないが何か触れてはいけない史実のような気がする。幕末の凄惨極まりない血を血で洗う藩内の抗争は明治政府の時代に入っても続いていたという。薩摩や長州、または土佐のような討幕思想の明確な裏打ちが無かったためか復讐の応酬に始終後味の良くない事件である。なぜ彼らの様にうまくやれなかったのか、烈公があと5年長く生きていてくれたら天狗党の乱は起きなかつたらうと悲しく思うのである。



幕末における水戸藩の混乱は「水戸っぽ」の血が問題ではなかつたらうかという人が多い。文化人類学者の故祖父江(そふえ)孝男(たかお)氏が書かれているように県民性について水戸は「骨っぽい」「理屈っぽい」「おこりっぽい」の“三っぽい”が茨城県の県民性を代表していると指摘している。短気でなにごとともカッカときて、情熱をたぎらせ、目的へと一途に突進する。極めて純粋なのだが悪く言えば単純ということである。天狗党にしても対立した諸生党にしてもその血が騒いだ結果ではないかと書物で読んだことがある。

天狗党の乱の後、無残な処刑が繰り返された。敦賀で処刑された天狗党総大将、武田(たけだ)耕(こう)雲齋(うんさい)の首は塩漬けにされて水戸におくられた。これで終わっていたら武家社会の慣習として“致し方なし”となっていたかもしれないが諸生派の市川三左衛門は、獄舎につないでいた耕雲齋の妻子を引きだし妻に耕雲齋の首を無理やり抱かせて打ち首にした。そればかりでなく、三歳から十一歳の娘や息子、下女にいたるまで耕雲齋と縁のつながるものを次々と打首にした。

今度は明治維新の幕開けで立場が逆転すると、京都に駐留していた水戸藩士三百名は水戸にもどってきた。このときの藩士は天狗党に近い人たちで、朝廷の勅書をもっているのが官軍である。同じ水戸藩でありながら、諸生党は「鳥羽伏見の戦い」以降、「賊軍」に転落してしまうのである。天狗党は武田耕雲齋の孫金次郎の時代になって「水府浮浪の徒」

から「官軍」に昇格した。市川三左衛門は最終的に捕らえられ逆磔刑(さかさはりつけのけい)に処されてしまう。天狗党からみれば見事に祖父の仇を討ったともいえるが、討たれた市川三左衛門はその辞世で「君ゆえに捨てる命はおしまねど忠が不忠になるぞ悲しき」と残している。もともと水戸藩の右派と左派の内部抗争である。単に藩内抗争というだけなら、どの藩にもあって珍しいものではないが、この両派はお互いに残虐な殺し合いを執拗にやっている。

烈公を中心とした「後期水戸学」の思想や諸改革が多くの功績を残したことは明白だが、良くも悪くも、この自ら育てた弘道館のエリート同士の対立を生んだことは間違いない。結果大勢の優秀な人材が無駄に失われ、その恨みが尾を引いているような気がするのである。また「水戸っぼ」の行動はあちらこちらでエスカレートし、幕末の不穏な時代に深く関わってしまう。その結果「安政の大獄」により不満をもつ水戸藩士たちは「桜田門外の変」を引き起こしてしまった。藩主を白昼堂々失った彦根藩（滋賀）の水戸藩への恨み、降伏した天狗党に対する 352 人の斬罪に対する彦根藩への恨み、水戸と彦根の確執はひどく、敦賀市が仲介して両者が和解し親善都市の提携をしたのは



1968 年、事件から百年以上をも経ている。全貌については諸説あり、あまりに根の深い話なので地元では話題にするのも憚られるが、こんなことを書いている私も水戸藩家老松岡城中山氏（高萩）に所縁があるので「水戸っぼ」の血が混ざっているのか、後先考えずに闇の歴史に触れているのかも知れない。（各写真は 6 月 27 日に弘道館を訪れた際のもの）